

# 第一次文代会の準備と文学者の組織化について

辻 田 正 雄

## 1. はじめに

1949年7月2日から19日まで、中華全国文学芸術工作者代表大会（文代会）が北平で開催された。大会は毛沢東の文芸方針の正しさを確認し<sup>(1)</sup>、郭沫若は閉会式で文学芸術界の全国の統一機構の成立を報告した<sup>(2)</sup>。新中国の文芸界の基本方針として、毛沢東の「文芸講話」を指針とすることと、文学者あるいは文芸工作者の組織化が決定されたのである。

文代会（第一次）は、その後の文学史のなかで当代文学の起点とみなされてきた。文代会で新中国の文芸組織、方針等が決定されたからである。ただ、文代会がどのように準備されたのかについては不明のことが多い<sup>(3)</sup>。

本稿は、文代会準備委員会の活動の分析を中心に、新中国の文芸界の基本方針とりわけ文学者の組織化にかかわる新しい組織形態がどのようにして決定されたのかを考察しようとするものである。

## 2. 文代会準備委員会の活動

まずはじめに、文代会開催準備について、どのように準備されたのか、また準備段階でどのような討議がなされたのか等、文代会開催準備の経過について、『人民日報』、『文芸報』ほか開催者の回想録や日記に拠ってみてみよう<sup>(4)</sup>。

1949年3月24日に文代会準備委員会が正式に成立し委員及び常務委員が選出され、同日、第1回会議が開催された。これ以後、準備委員会で文代会代表の選出、新しい組織形態、文芸方針が討議され、新中国の文芸界の方向性が決定されることになる。

4月6日、第2回会議が開催された<sup>(5)</sup>。この会議で常務委員会の下

に秘書処を設け日常の準備活動業務を進めることが決定された<sup>(6)</sup>。

設置が決定された4部門の専門委員会とその主任は次の通りである。

①作品選考委員会（主任、茅盾）

作品選考委員会の下に次の5つの部門別小組が設けられる。

①小説組（幹事、葉聖陶）

②詩歌組（幹事、胡風、艾青）

③演劇映画組（幹事、馬彥祥）

④音楽組（幹事、賀綠汀）

⑤美術組（幹事、葉淺予）

②演出委員会（主任、欧陽予倩）

③展覽委員会（主任、葉淺予）

④規約・重要文書起草委員会（主任、沙可夫）

そのほか、茅盾、胡風、厂民（嚴辰）の3人から成る『文芸報』編集委員会を設置することも決定された。

4月15日、規約・重要文書起草委員会が開催された。また、その夜、常務委員会拡大会議が開催された<sup>(7)</sup>。『文芸報』の創刊が正式に決定され、胡風が『文芸報』編集長を担当するよう茅盾により提案された<sup>(8)</sup>。しかし、胡風は固辞する<sup>(9)</sup>。

胡風の固辞は文代会準備委員会の発足が胡風抜きで進められたことも関係しているだろう。『胡風日記』に拠れば胡風が北平に到着するのは3月26日で、3月24日に開催された準備委員会第1回会議の決定に胡風は関わっていない。この決定には中華全国文芸協会の北平移転をはじめ重要事項が多く含まれているが、胡風はこれらのことを北平到着後に知らされることになる。しかも胡風は中華全国文芸協会の理論研究部門の中心人物のひとりであった。胡風が『文芸報』編集長就任を固辞したのは、このような経緯による準備委員会委員あるいは常務委員に対する不信感や新しい組織の性格に対する疑念を胡風がいだいていたことによるものと思われる。

胡風の編集長就任はなかったが、『文芸報』は5月4日に創刊される。編集者は「中華全国文学芸術工作者代表大会準備委員会文芸報編集員

会」と記すのみであるが、茅盾が中心になったことは間違いない。その発刊のことばで「多くの文学芸術活動に従事する人たちから、経験交流、意見交換のために各地の文学芸術活動の状況を報道し大衆の意見を反映する定期刊行物が望まれてきた」と発刊理由が述べられている<sup>(10)</sup>。

この『文芸報』発刊のことばは無署名であるが、茅盾が執筆したものである<sup>(11)</sup>。

また、『文芸報』創刊号に茅盾署名の文章を発表し、文代会に関連するさまざまな問題について「個人的感想」を述べている<sup>(12)</sup>。

その内容は次の通りである。

㊦文代会代表の選出方法

㊦新しい全国文協の組織方式

㊦新しい全国文協の性質

㊦文代会準備委員会で進められている文芸作品の選考

茅盾はこれらの問題について討論をするよう呼びかけているだけで自分の主張を前面に出しているわけではないが、討論は茅盾が主導した。そして、茅盾は1946年8月、ソ連対外文化協会（VOKS）のソ連訪問要請を受け、1946年12月から1947年4月までソ連を訪問している。この訪ソは中国でとりわけ重視されたし、茅盾自身もソビエト作家同盟の紹介を行い、また文学に関するソ連の制度も高く評価していた<sup>(13)</sup>。これは当然『文芸報』での討論にも反映されることになる。

次に上記の㊦～㊦についてももう少し詳しくみてみよう。

### 3. 文代会代表の選出方法

文代会代表は中華全国文芸協会（文協）会員が中心となることは当然であるが、全国大会代表である以上各地の会員による会議によって選出されなければならない。だが、当時の状況下では各地で会議を開催して決定することは困難であった。

たとえば、解放区では文協会員は農村や軍隊に散在しているうえそれぞれがその場でそれぞれの業務に多忙であって、会員が集まって会議を開くことは物理的にも時間的にも困難であった。また、国民党統治区

（国統区）では弾圧の危険性があり困難は解放区以上であった。それゆえ、大会代表は当然代表と招請代表とするという基本方針が準備委員会で決められた。

当然代表とは、各地の文協の理事及び候補理事（監事のいる文協は監事も加える）のことで、自動的に代表とする。解放区では五大解放区の文協の理事及び候補理事が当然代表に、国統区では文協総会と分会の正規及び候補の理事と監事が当然代表となる。

招請代表とは、各地の文協の推薦あるいは個人による推挙により最終的に準備委員会によって決定される代表である。

このうち招請代表をどのように選出するのかが問題となるが、この点について矛盾は、文芸部門の代表的人物で政治的立場が反動でないものや、革命文芸の分野で長年にわたって成果をあげているものが招請代表に含まれるべきであると述べている。

実際のところ招請代表の選出にはさまざまな問題が生じた。夏衍は準備委員会委員のひとりで、文代会南方第二団の代表であったが、文代会には出席せず上海市軍管会文化接收管理委員会副主任として活動した。夏衍の上海での活動のひとつとして文代会上海代表の名簿作成がある。この時夏衍は党外人士の意見を求めたり、代表間の人間関係の軋轢に配慮するなどして団結を強調した選出を行っている<sup>(14)</sup>。

#### 4. 組織形態をめぐる討論

新しい全国文学組織の組織方式については、全国規模の総会の他に各地に分会を設置するかどうか、多くの分野を含んだ総合的な総会や分会の他に映画、音楽などについて単一の部門別組織を設置するかどうか、そして分会を設置した場合、総会と分会の関係はどういう性格のものとするか、また新しい全国文協は同業者組合か文芸運動の指揮部か等が議論される。

主な意見は『文芸報』に発表された。次にその内容をみてみよう。

##### A. 華北大学

5月19日、華北大学文芸学院文学創作組は新しい組織について意見

を発表した<sup>(15)</sup>。華北大学は1948年に華北聯合大学と北方大学が合併したもので学生総数は1万3千人であった。政治、教育、文芸等の分野での幹部養成を目的とした大学であろう。そのうち文芸学院の学生数は約1千人である<sup>(16)</sup>。

『文芸報』誌上の意見は次の8名の連名である。臧克家（1905-2004）、碧野（1916-2008）、蘇金傘（1906-1997）、陳北鷗（1912-1981）、徐放（1921- ）、青苗（1915-2005）、司空谷（不詳）、黃秋池（不詳）。このうち不詳の2名を別にして、臧克家以外は延安などの解放区出身である。中心となった臧克家は新月派詩人聞一多の学生である。臧克家は重慶で中華全国文芸界抗敵協会に参加し、その後上海や香港で活動していた。1949年3月、党組織の手配によって香港から北平に入り、5月に華北大学文学創作研究室の研究員となっている。この研究室の責任は張光年であった。臧克家は非黨員であるが、国統区出身の文学者として新体制に協力することが期待されていたと考えられる。

『文芸報』誌上の意見は、新しい文協は共産党が指導する大衆団体であるべきで、政治的要請に呼応して正しい文芸方針によって大衆を教育しなければならない、とするものであった。

#### B. 華北軍区抗敵劇社

5月20日、華北軍区抗敵劇社創作組が座談会を開き、現場の不足点を指摘し新しい組織に対する希望を述べた<sup>(17)</sup>。座談会の参加者は次の9名である。杜烽（1920- ）、胡海珠（1922-2010。侯金鏡夫人）、輕影（不詳）、陳孟君（1924- ）、歌焚（不詳）、古立高（1923-2007）、羽山（1921- ）、胡朋（1916-2004。胡可夫人）、胡可（1921- ）。2名が不詳である以外、他は全員黨員である。

新しい組織に対する意見は、メンバーの羽山が個人名で発表したものが部隊文芸工作者の意見をよく反映している。羽山は、新しい文協は全国的な文芸大衆団体で思想的指導や具体的活動の指導をすべきであり、同業者組合では指導的役割を果たすことはできないと断じる<sup>(18)</sup>。

#### C. 『文芸報』第1回座談会

5月22日、『文芸報』は第1回座談会を開催した。参加者は国統区の

平津二団と南方一団の代表が中心である。茅盾が司会を務め、16 名（内 1 名は代理出席）が参加し、都合で参加できなかった葉浅予と宋雲彬が書面で意見を提出した<sup>(19)</sup>。

参加者は次の通り。茅盾（司会）、李樺（1907-1994。版画家。平津二団）、焦菊隱（1905-1975。戯劇家。平津二団）、顧仲彝（1903-1965。戯劇家。上海劇芸社。上海救亡協会。南方一団）、柯靈（1909-2000。戯劇家。映画脚本家。南方一団）、黄蘗眠（1903-1987。文芸理論家。南方一団団委）、魏荒弩（1918-2006。ロシア語翻訳家。平津二団）、張駿祥（1910-1996。映画監督。香港、永華影業公司。南方一団）、鍾敬文（1903-2002。民俗学者。南方一団）、楊振声（1899-1956。小説家。西南聯大教授。平津二団）、沈起予（1903-1970。小説家。日本語翻訳家。南方一団）、臧克家（1905-2004。詩人。南方一団）、楊晦（1899-1983。劇作家。南方一団）、馮至（1905-1993。詩人。西南聯大教授。平津二団副団長）、卡之琳（1910-2000。詩人。西南聯大副教授。南方一団）、嚴辰（1914-2003。詩人。平津一団。延安文芸座談会出席）、聞家泗（1905-1997。馮至代理。フランス語翻訳家。西南聯大教授。平津二団団委）。宋雲彬（1898-1979）は文史学者で南方一団代表である。葉浅予（1907-1995）は画家で漫画界救亡会で活躍し平津二団代表である。いずれも主として国統区で小説、演劇、詩、映画などの分野で活躍した文芸界の著名人である。座談会でのかれらの発言はほとんどが新文協が文芸運動を指導することを当然視するものであった。書面発言を作った葉浅予は新しい文協について、文協は文芸工作者の総指揮部であって同業者組合であってはならないとの意見を述べている<sup>(20)</sup>。

また顧仲彝はこの座談会の発言で、旧文協は同業者組合的性格が強かったがこれは改めるべきであり、新文協は新しい文芸政策と新しい文芸運動の指揮部であらねばならないと述べている。そしてこの発言内容をより具体化した意見を『文芸報』誌上で提案し、新文協は旧作家の改造と新しい作家の育成を任務とすべきだと主張している<sup>(21)</sup>。

#### D. 『文芸報』第2回座談会

5月30日、『文芸報』は第2回座談会を開催した。今回も司会は茅盾

がとりおこなった。

出席者は、徐悲鴻（平津二団）、戴愛蓮（平津二団）、鳳子（平津二団）、嚴辰（平津一団）以外は全員南方一団の代表である。しかも南方一団のうち香港から北平に到着した代表と世界平和大会に参加しモスクワを経て帰国した代表が中心である。

世界平和大会から帰国した南方一団の代表は、鄭振鐸、田漢、洪深、曹禺、戈宝権、許広平のほか徐悲鴻、戴愛蓮らである。

香港からの代表は、駱賓基、呂熒、舒綉文、蔣牧良、趙楓、白楊らである<sup>(22)</sup>。

世界平和大会から帰国した代表は主としてソビエトの文芸界の紹介を行っている。たとえばソビエト作家同盟の紹介（鄭振鐸）や、ソ連の作家が現場に入っている状況の紹介（田漢）や、ソビエト作家同盟の福利厚生面での充実や独自の出版機構を持っていることを中国でも見習うべきだ（戈宝権）等の発言を行っている。一方、香港からの代表の発言は少なく、解放区での経験に学びたい（舒綉文）とか、どのように学べばよいのか、どのように自己変革すればよいのかという率直な疑問を出したり（白楊）している。

この座談会では、新文協について上述の①～③で出されたような方向性をソ連の事例で確認し、全員がむしろ積極的に賛同している。

劉念渠<sup>(23)</sup>は将来の文協について次のように述べている——「未来の文協は、まず全国の文学芸術工作者を団結させる組織である。次に文芸政策を伝達しかつ文芸政策を遂行する組織である。三番目に全国の文芸活動を推進しかつ指導する組織である。四番目として文芸工作者が常に批判と自己批判を行う組織である」<sup>(24)</sup>。

劉念渠のこの意見は新文協についてのこの段階での共通認識を要約したものであろう。そしてこの時、ソ連モデルが多くの討論参加者に影響を与えていたと考えられる。

## 5. ソ連モデル

既に述べたように茅盾は 1947 年 12 月から 1948 年 4 月までソ連を

訪問した。香港から上海を経て 1947 年 12 月 25 日にモスクワに到着している。茅盾は博物館、映画撮影所、大学、革命遺跡などを見学するほか、ソ連の作家と会って質問したり意見交換をしている。

茅盾は帰国後ソ連文芸界の状況をさかんに紹介している<sup>(25)</sup>。そしてソ連を例にして、中国の文壇でも問題になった「文芸の自由」についても文章を発表している。茅盾はまず「文芸の自由」とは、文芸はいかなる功利主義とも関係がない、つまり政治と関係がないとして文芸創作は作家の自由意志に基づくべきだとする主張である、と定義する。そして、中国でも「第三種人」が問題になったことがあるが、かれらは統治階層に奉仕するものであることが実践によって証明されたと中国の文壇を総括する。そしてソ連の場合を例に挙げて、ソ連の作家は労働者の一員であり、「人民に奉仕する」という趣旨の下、ソ連の作家の執筆範囲は広く、自由である。春画、媚薬、ヒロインなどのような作品を作る作家から見ればソ連には自由はないのだ、と述べている<sup>(26)</sup>。

これは新文協の性質にもかかわる基本的認識であり、この点について多くの文代会代表は同意していたと考えられる。それは先進のソ連での実践ということと、新中国の建設に積極的に参加したいといういつわりのない気持ちがゆえであったと思われる。

茅盾以外の文学者もソ連を訪問している。丁玲は、1948 年ハンガリーで開催された世界民主婦聯第 2 回代表大会に参加し、帰途ソ連を訪問し、12 月にファジェーエフと会見している。ファジェーエフはパルチザンを描いた長編『壊滅』（1927 年）で一躍有名になった作家で、この時ソビエト作家同盟書記長であった。作家である以上に文学運動の組織者かつ理論家として中国の作家と会見したと言ってよいであろう。

丁玲のファジェーエフ訪問記は『人民日報』に掲載された<sup>(27)</sup>。丁玲はソ連社会主義の組織と指導方法について質問している。ファジェーエフはそれに対し、「まず文芸工作担当の中央機関を組織すべきである。現時点でそれが難しければ準備会を設ける必要がある。この組織は作家の団体であって連合体の団体であってはならない。つまり団体会員は必要ない。」「われわれは作家の作品を通じて大衆を教育している」<sup>(28)</sup>と



答えている。

また、郭沫若は1945年6月から8月にかけてソビエトアカデミーの招待でソ連を旅行している<sup>(29)</sup>。郭沫若のこの訪ソが中国文芸界にどのような影響を与えたかはよく判らないが、新中国建国直前にソ連は社会主義建設を進めるにあたって見習うべき先輩であり先生であるという認識は、茅盾や丁玲らに限らないものであったであろう。

文学組織については、共産党が指導する唯一の全国組織によって作家の生活保障や創作活動指導を行うというソ連の文学制度が、多くの文代会代表に評価され新中国の文学体制の主な構成要素となったと考えられる。

## 6. 党の報告制度

新文協を党が指導する全国組織であると位置付けると、その指導はどのようにして進めるのか。この問題を党の側から見てみると党の報告制度が大きな意味を持つことが判る。

政権奪取が近いうちに実現できることがほぼ確実であることがはっきりしてくると中共中央とりわけ毛沢東は党の報告制度の確立を重視した。

1948年1月7日、中共中央は「報告制度の確立について」という指示を出した。これは毛沢東が起草した文書である。

この指示は革命戦争の勝利をかちとるために次のような報告制度をもうけるとしている——「各中央局と分局は、書記が責任をもち、二カ月に一回党中央と党中央の主席に総合報告を行う。報告の内容は、その地区の軍事、政治、土地改革、整党、経済、宣伝、文化などの諸活動の動態、活動のなかでうまれた問題と偏向、それらの問題や偏向の解決方法などとする。」「全党の各級指導機関は、上級にたいして事前に指示を要請しなければ、事後に報告もしないといったよくない習慣をあらためなければならない。各中央局と分局は、党中央の委任を受け、党中央を代表し、党中央が委託した任務を遂行する機関であって、党中央とはもともと緊密なつながりをもたねばならない」<sup>(30)</sup>。

これはすべての権力を党中央に集中させることを目的としたものであ

る。

その後も中共中央はより具体的な指示を出しており、詳細な規定も定めている<sup>(31)</sup>。

これらの指示は新中国建国後には民主党派の定期刊行物の扱いや、党外の民主人士の参画する全国的文化組織に対する措置にいたるまで具体的に述べられている<sup>(32)</sup>。

また組織成員に占める共産党員の比率についても毛沢東がかつて出した党内指示が影響しているだろう。

毛沢東は「抗日根拠地の政権問題」で次のように述べている——「抗日民族統一戦線政権の原則にもとづいて、人員配分では、共産党員が三分の一を占め、党外の左派の進歩的な人びとが三分の一を占め、左でもない中間派が三分の一を占めるようにきめるべきである。」「政権のなかで共産党員が指導的地位を占めるよう保証しなければならず、そのためには、三分の一を占める共産党員が質的にすぐれた条件をもつようにしなければならない。この条件さえあれば、党の指導権は保障されるのであって、それ以上の人数を必要としない」<sup>(33)</sup>。

これは抗日民主政権樹立を目的とした 1940 年の指示であるが、抗戦勝利後も新政権樹立に向けた指針とされたと思われる。

また、組織建設についての毛沢東の考えがよく反映されている事例として趙秀山らの紹介がある。その内容はひとつは事前に指示をあおぎ事後に報告することを求めること。もうひとつは団体の主席、副主席のうち一名は必ず民主人士であることである<sup>(34)</sup>。

1949 年に入ると多くの民主人士の北平入りにあたって党が中心となった歓迎会が開かれることになる。民主人士歓迎会は中共東北局が進めたと思われるが、中共中央は民主人士に対する扱い等について東北局に具体的に指示を出している。その内容は活動を進めるにあたっては民主人士の責任者とよく相談せよとか、民主人士の生活条件や健康状況にも配慮せよといったことにまで及んでいる<sup>(35)</sup>。

ここで文代会準備委員会に設けられた専門委員会のひとつである規約・重要文書起草委員会の構成員に目を向けてみよう。委員は当初次の

7名であった——沙可夫（1903-1961。1926年入党）、葉聖陶（1894-1988。中国民主促進会）、馮乃超（1901-1983。1928年入党）、胡風（1902-1985。1929年日本で入党）、陽翰笙（1902-1993。1925年入党）、周揚（1908-1989。1927年入党）、茅盾（1896-1981。1921年入党）。その後追加メンバーとして次の4名が加わる——胡繩（1918-2000。1938年入党。文化指導部門及び統一戦線工作従事）、黄葉眠（1903-1987。1928年入党。また1941年から香港で活動し1944年中国民主同盟に加わる）、鍾敬文（1903-2002。1947年から香港で教鞭を執る）、楊晦（1899-1983。1949年4月に香港から北平着）。主任は沙可夫で、秘書は康濯（1920-1991。1938年入党）が務めた<sup>(36)</sup>。

民主人士が追加されているのは上述の党員と民主人士の比率を配慮からであろう。

## 7. 結語

1949年7月14日に文代会で採択された中華全国文学芸術界聯合会（全国文聯）の規約では、次のように政治運動と密接な関係が述べられている——全国のすべての愛国の民主的文学芸術工作者が団結して、全国人民とともに、帝国主義及び封建主義と官僚資本主義を打倒することを目的とする（第三条）。積極的に人民解放闘争と新民主主義国家建設に参加することを活動の任務とする（第四条の一）。また、革命理論の学習も任務のひとつとする（第四条の五）。

これらは抗戦時期の文学運動の延長である。

次に、文代会で成立した全国文聯の各部の責任者についてみてみよう。名簿の最初が主任で後の2名が副主任である。

- 秘書長：沙可夫（平津一団）、黄葉眠（南方一団）、周巍峙（平津一団）
- 連絡部：蕭三（華北団）、馮乃超（南方一団）、葉浅予（平津二団）
- 編集部：丁玲（東北団）、曹禺（南方一団）、何其芳（平津一団）
- 福利部：鄭振鐸（南方一団）、陽翰笙（南方一団）、江豊（平津一団）

。指導部：柯仲平（西北団）、張致祥（部隊）、阿英（華北団）

解放区と国統区（南方一団、平津二団）のバランスを考慮しているとはいえ、福利部主任の鄭振鐸が国統区出身である以外、他のすべての主任は解放区出身である。これは文代会準備委員会の下規約・重要文書起草委員会の委員選出の方式とよく似ている。成員は多様であるが主要部門の責任者は黨員しかも解放区の黨員である。

新しい文学組織の成立について多くの国統区出身の文代会代表の意見も聴取された。文芸運動の指導部として位置付けもなされた。しかし党の指導について明文化されてはいない。また意見が明確に統一されていたわけではない。それは黨員の場合でも同様であったと思われる。ただソ連モデルを高く評価した当時の時代背景下にあつて、新しい文学組織がソ連モデルであることによって納得され承認された。一部の黨員を除いて党の報告制度を適用することまで考えられていなかったであろう。たとえば、1953年の第二次文代会で胡喬木がソ連の文芸制度改革にならって中国も同様に全国文聯をなくして各専門の分野別協会だけにして、長期にわたって作品を書いていない虚名の文学者を排除するよう提案したとき、毛沢東は全国文聯をなくすことは旧世代の文芸家との団結に不利だと激怒し猛反対した<sup>(37)</sup>。このことはその傍証と言えるかもしれない。

文代会と全国文聯は文芸界の団結をうたった。中国全土の広範な層から成る新しい文学組織であることが新しい文学体制の正統性の根拠であったから、団結の強調が絶対に必要であった。その場合必ず不協和音が生じる。それをチェックするためにも組織化が必要であり、報告制度が有効であった。

文学者は組織化された。新しく成立した文学者の組織の会員に選出されることは名誉であり、生活の保証を得ることもできた。当時の新中国成立直前の社会の興奮と新中国建設に参加するという個人の熱い思いのなかで、会員になることによって政治的任務や革命理論の学習はむしろ当然のこととして受けいれられた。

その一方で、作品を発表する場である雑誌や書籍などを扱う印刷・出

版・販売機構が国有化されていくと、「文学・芸術は人民のためのものである。」「とりわけプロレタリア階級の立場に立つべき」<sup>38</sup>である以上、そうでないあるいはそうでないとされた文学作品はその発表の場も徐々に失っていくことになる。

〔注釈〕

- (1) 《中华全国文学艺术工作者代表大会的决议》《人民日报》1949年7月20日。
- (2) 《郭沫若在文代会闭幕会上的结束报告》《人民日报》1949年7月20日。
- (3) 文代会の準備を進めた文代会準備委員会については、拙稿「第一次全国文学芸術工作者代表大会の準備について」『文学部論集』第96号、佛教大学、2012年3月、を参照。
- (4) 中华全国文学艺术工作者代表大会宣传处编《中华全国文学艺术工作者代表大会纪念文集》(新华书店、1950年3月)は、文代会に関する基本資料である。同書所収《大会筹备经过》(P.125 - P.128)は文代会の準備経過を整理した公的記録であるが、記述が簡単すぎてこの記述から詳細はよく判らない。
- (5) 斯炎伟《中华全国文学艺术工作者代表大会纪事》(《全国第一次文代会与新中国文学体制的建构》人民文学出版社、2008年10月、P.232)は4月初とする。晓风辑注《胡风日记(上)》《新文学史料》1998年第4期[11月]に4月6日〈文协筹委会开会〉と記す。『胡風日記』に従う。
- (6) 《文代会筹委会消息》《文艺报》创刊号[1949年5月4日]。
- (7) 《文艺工作者代表会筹备会常委开会》《人民日报》1949年4月16日。
- (8) 注5の斯炎伟《中华全国文学艺术工作者代表大会纪事》に拠る。
- (9) 《胡风日记》1949年4月17日、20日、26日、30日の条を参照。
- (10) 《发刊词》《文艺报》创刊号。
- (11) 《〈文艺报〉周刊发刊词》として《茅盾全集》第24卷(人民文学出版

社、1996年)に収められている。

(12) 茅盾《一些零碎的感想》《文艺报》创刊号。

(13) 茅盾《苏联见闻录》上海开明书店、1948年4月、参照。

(14) 夏衍《懒寻旧梦录》《夏衍全集第15卷》浙江出版社、2005年12月、P.324。原載は《从香港回到上海》《人民文学》1986年第1期であるが一部異同がある。全集版は誤植を訂正したものと思われる。全集版に拠る。

(15) 华北大学文艺学院文学创作组《关于新文协的几点意见》《文艺报》第3期[1949年5月19日]。

(16) 金凤《华北大学介绍之一》《人民日报》1949年7月11日。

金凤《华北大学介绍之二》《人民日报》1949年7月14日。

華北大学の基礎となった華北聯合大学は魯迅芸術学院や陝西公学などが統合されてできたものであり、北方大学も同様に多くの学校や訓練所が統合されてできたものである。

(17) 华北军区抗敌剧社创作组《我们对新文协的希望》《文艺报》第5期[1949年6月2日]。

(18) 羽山《意见两三点》《文艺报》第2期[1949年5月12日]。

(19) 《新文协的任务、组织、细领及其他》《文艺报》第5期。

(20) 叶浅予《关于新文协的意见》《文艺报》第4期[1949年5月26日]。

(21) 顾仲彝《对新文协的几个建议》《文艺报》第6期[1949年6月9日]。

(22) 《关于新文协的诸问题》《文艺报》第6期。

(23) 劉念渠についてはよく判らない。劇本《白娘子》(上海《春秋》1949年3月10日)を執筆したという。文代会の平津二団代表で文代会で成立した中華戲劇工作者協會の候補全国委員に選出されている。

(24) 刘念渠《关于未来的文协》《文艺报》第6期。

(25) 茅盾《杂谈苏联》上海、致用书店、1949年4月。特にこのうち下記

を参照。

三四、苏联文学的民主性

三五、苏联作家的生活及青年作家

三八、莫斯科的话剧院

三九、电影事业

四二、“全苏作曲家协会”

(26) 茅盾《谈“文艺自由”在苏联》(1948年9月)《茅盾全集》第33卷、人民文学出版社、2001年。

(27) 《人民日报》1949年4月28日～30日連載。

(28) 丁玲《法捷耶夫同志告诉了我些什么》《人民日报》1949年4月28日。また『胡風日記』1949年1月20日の条を参照。

(29) 郭沫若は中ソ文化協会(1935年10月～1949年4月)下の『中蘇文化』雑誌委員会の責任者であった。

(30) 毛泽东《关于建立报告制度》《毛泽东选集》第4卷、人民出版社、1991年6月第2版。日本語訳は「報告制度の確立について」『毛沢東選集』第4卷、外文出版社、1968年。

(31) 《中央关于建立报告制度的补充指示》(1948年3月25日)では、下級に出した指示は必ず中央に報告することを義務づけた。続いて《中共中央关于宣传工作中请示与报告制度的规定》(1948年6月5日)では主として宣伝部の活動について分局は中央に報告することを指示した。そして《中共中央关于各中央局、分局、军区、军委分会及前委会向中央请示报告制度的决议》(1948年9月)では中央の権限の強化を明文化し、文教宣伝面の規定を詳しく定めている。これは1949年12月5日の指示(注32参照)につながる内容である。以上、中央档案馆編《中共中央文件选集》第17册、中共中央党校出版社、1992年10月、所収。

(32) 《中共中央关于中央人民政府成立后党的文化教育工作问题的指示》(1949年12月5日)中共中央文献研究室編《建国以来重要文献选编》第1册、中央文献出版社、1992年5月。

- (33) 毛泽东《抗日根据地的政权问题》(1940年3月6日)《毛泽东选集》第2卷、人民出版社、1991年6月第2版。日本語訳は「抗日根拠地の政権問題」『毛沢東選集』第2卷、外文出版社、1968年。
- (34) 赵秀山、赵军威《与党外民主人士合作不允许一点马虎》《百年潮》2012年第6期。
- (35) 《中央关于对待民主人士的指示》(1949年1月22日)《中共中央文件选集》第18册、中共中央党校出版社、1992年10月。
- (36) 《文艺动态》《文艺报》第3期。
- (37) 《谈周扬——张光年、李辉对话录》《新文学史料》1996年第2期[5月]。張光年は、これは老作家の生活面と過去の貢献に対して毛沢東が配慮したからであると述べているが、組織を残すことによって党が管理をしやすくなるという一面も無視できないであろう。
- (38) 毛泽东《在延安文艺座谈会上的讲话》《毛泽东选集》第3卷、人民出版社、1991年6月第2版。